

## 秩序をめぐる探求（巻頭エッセイ）

著者	河野 勝
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	190
ページ	1-1
発行年	2011-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00046122">http://doi.org/10.20561/00046122</a>

河野 勝

### 秩序をめぐる探求

ゲーム理論などで「調整問題」と呼ばれる状況がある。「調整」が成立してないと大変な目に遭うという状況のことである。たとえば、右側通行か左側通行かをルールとして決めておかないと、交差点を曲がったときに命を危うくするような事故が起きてしまうとか、信号が設置されていないといつまでたっても歩行者は車が行き来する道路を横断できず、きわめて非効率的だ、といった問題である。

私のような政治学者が調整問題に興味を引かれるのは、政治学の究極的な関心が秩序というものであるからである。そもそも人間社会の秩序は、どのようにして生まれてくるのか。また、いったんできあがった秩序は、いかにして維持されるのか。志高い世界のリーダーたちは、平和のための国際秩序を希求し、民主化後の国家秩序の安定を模索する。そうした崇高な取り組みも、もしかすると、われわれの身近にある調整問題の解決からヒントを学べるかもしれない。

最近、私自身が遭遇したふたつのエピソードを紹介しよう。

ひとつは、今年の四月、はじめてベトナムのハノイを訪れたときのこと。どこもかしこも路上は、暴走するバイクで覆い尽くされている。レーンはあつてないようなもので、一方通行を平気で逆走するバイクさえある。もちろん信号などはないし、あつてもみなほとんど無視。では、この混沌のなかに秩序がまったくないのか、というところ、そんなことはない。よそ者の目からすると運転不可能とは思えないなかでも、現地の人たちはお互い接触せずにちゃんと運転しているし、歩行者も、お年寄りであるうが子供であるうが躊躇することなく一歩を踏み出し、は

ねられることなく道路をしっかりと横断している。

もうひとつは、五月に久々に関西に出張したときのこと。ご存知の通り、東京と関西では、エスカレーターに乗るときの慣行が異なる。東京では左側に並び右側を空け、空いた右側を急いでいる人が駆け抜けていく。一方、関西ではまったく逆で、「右並び、左空け」。たとえば、東京から新幹線に乗り新大阪で降りると、プラットホームから下るエスカレーターに乗ったところすでに、この慣行が成立していることに気づかされる。ところが、今回の出張では、さらに面白いことを発見した。夜、私が帰りの新幹線へ乗るためプラットホームに上るエスカレーターに乗り合わせると、そこではなんと見事に「左並び、右空け」が、つまり東京型の慣行が、成立していた。そう、同じ新大阪の駅でありながら、なのである。

この二つのエピソードはどちらも、調整問題の解決の鍵が、人々によって共有されている期待があるかないかにかかっている、ということを物語っている。ベトナムでベトナムなりに交通秩序が成立しているのは、現地の人たちのあいだではどうしたら事故を避けられるかという最低限の了解が共有されているからである。新大阪駅で東京型のエスカレーター慣行が成立しうるのもまったく同じで、そこにいる人たちの多くが「夜のこの時間に東京行きの新幹線に乗ろうとしている人の多くは、東京へ帰る人だろう」という認識を共有できているからである。

では、人々の間で共有されるようになるかどうかは、期待は、どのようにして生まれ、どのように維持されるのか。秩序をめぐる探求は、結局のところ一回りして（空回りして？）同じ出発点に戻ってくるということ、よく繰り返すのである。

この まさる／早稲田大学政治経済学術院教授

スタンフォード大学Ph.D（政治学）。プリティッシュコロニア大学政治学部助教授、青山学院大学国際政治経済学部助教授を経て、2003年より現職。早稲田大学現代日本社会システム研究所の所長もつとめる。著書にJapan's Postwar Party Politics (Princeton University Press)、『制度』（東京大学出版会）、『2009年、なぜ政権交代だったのか』（共著、勁草書房）などがある。